

横浜市インフルエンザ流行情報 10号

横浜市衛生研究所 / 横浜市健康福祉局健康安全課

《トピックス》

【警報発令中】患者数が大幅に増加しています。

【概況】

2017年第4週(2017年1月23日～29日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、横浜市全体で **48.06** と、警報を発令した第3週から大幅に増加しています。

学級閉鎖等は第4週だけで142件の報告があり、急激に増加しています。また、医療機関、高齢者施設内での集団発生の報告も多い状況が続いており、外部からの持込み防止対策や職員及び入所者等の健康観察の強化が重要です。

また、入院患者の報告数は増え続けており、同じくAH3型(A香港型)が流行した2014/15シーズンより多く報告されています(本文5参照)。1月以降インフルエンザ脳症が2件報告されており、重症化についても注意が必要です。

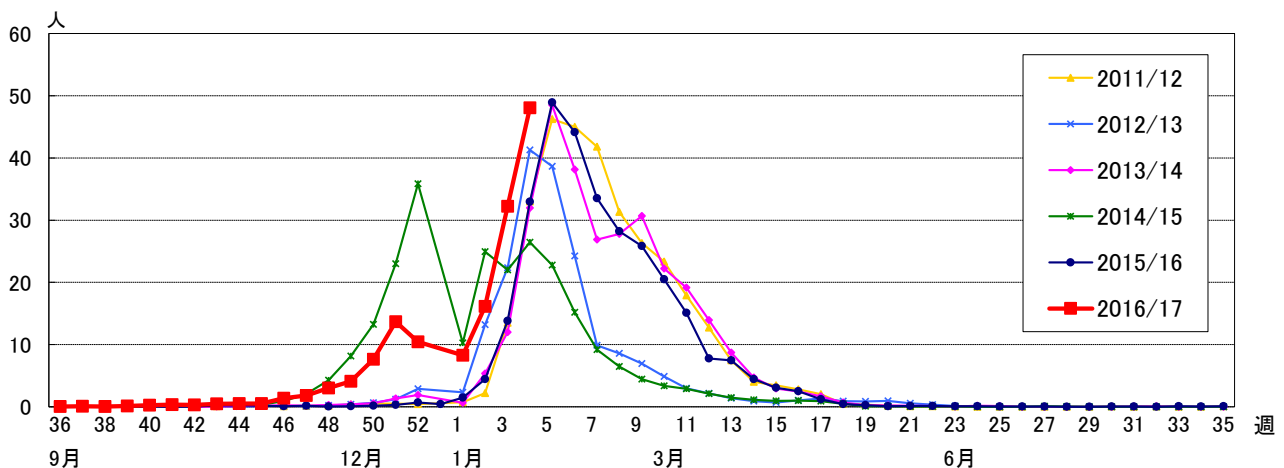
第4週の迅速診断キットの結果は **A型 95.8%、B型 4.2%、A・B型ともに陽性 0.05%** となっています。市内のウイルス検出状況では、ほとんどが **AH3型(A香港型)** です(本文7参照)。

例年、流行警報は2月から3月まで続きます。引き続き、予防や早期受診などの対策^{※2}を心がけましょう。

※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 [市民向けインフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

1 市内流行状況:市全体の定点あたりの患者報告数は第4週で48.06となり、流行警報発令基準値(30.00)を上回った第3週の32.23から大幅に増加しています。

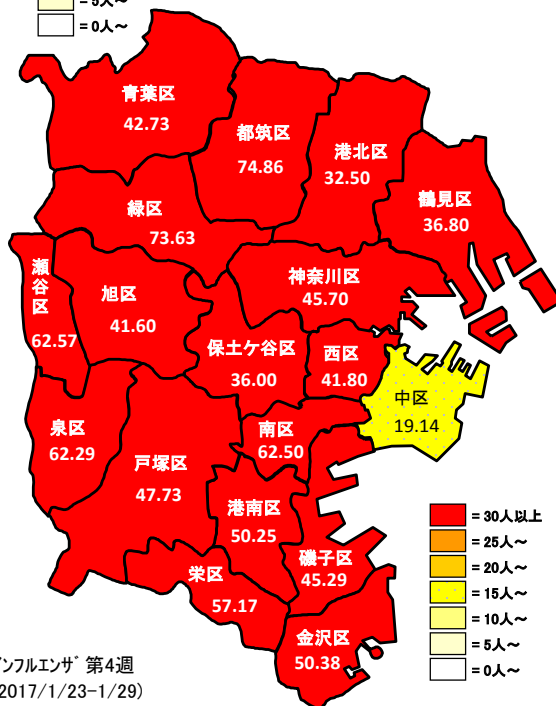
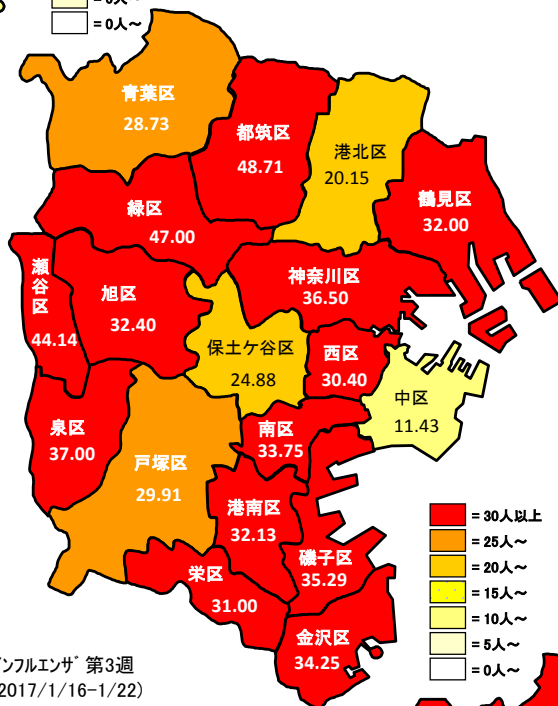
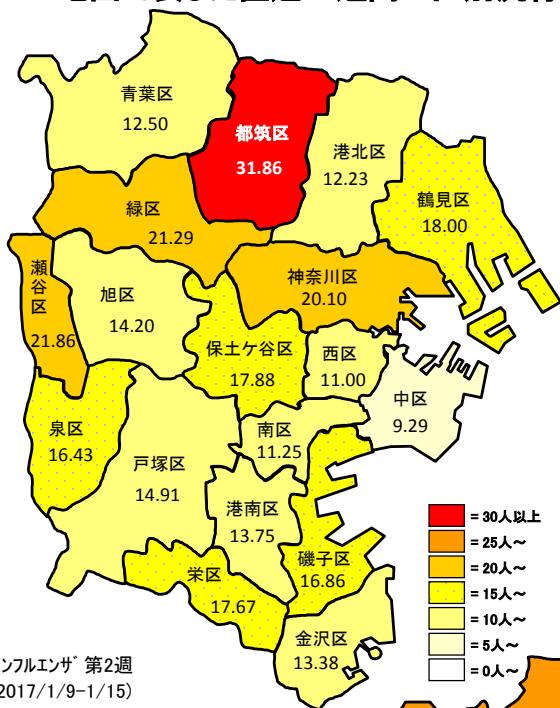


2 地図で表した直近 3 週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)

2017年第3週(1月16日~22日)に市全体で警報発令基準値(30.00)を上回りましたが、第4週はさらに増加し、17区で警報発令基準値を上回っています。

警報は解除基準値(10.00)を下回るまで続き、直近の5年間では、概ね2月中旬から3月下旬までの期間に解除されています。昨シーズンは第4週(1月25日~31日)で警報発令、第12週(3月21日~27日)で解除されています。

流行警報はまだ続きますので、ワクチンの接種の有無に関わらず、引き続き、手洗い等の予防策の徹底が重要です。



【参考リンク】

近隣自治体の流行状況

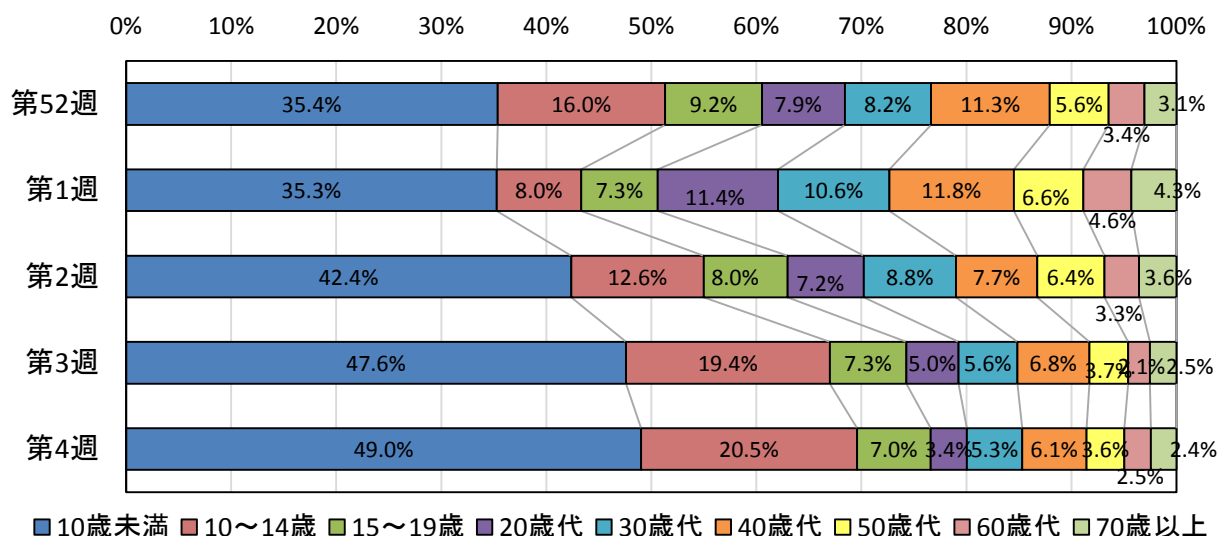
- [神奈川県](#)
- [川崎市](#)
- [東京都](#)

全国の流行状況

- [国立感染症研究所](#)

3 年齢層別集計:第4週の患者年齢構成は、10歳未満が全体の49.0%、10歳以上15歳未満が20.5%となっており、15歳未満が全体の約7割を占めています。学級閉鎖等の報告も急増していますので、引き続き小学校や中学校での感染予防策の徹底が重要です。

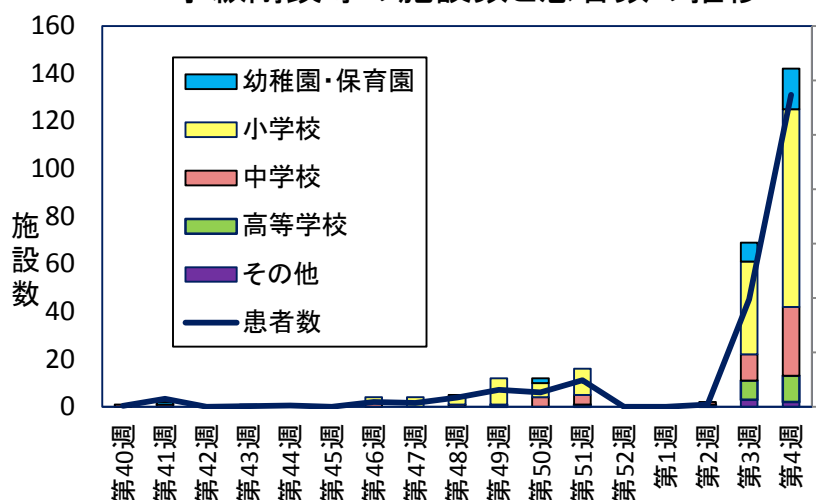
年齢層別患者割合



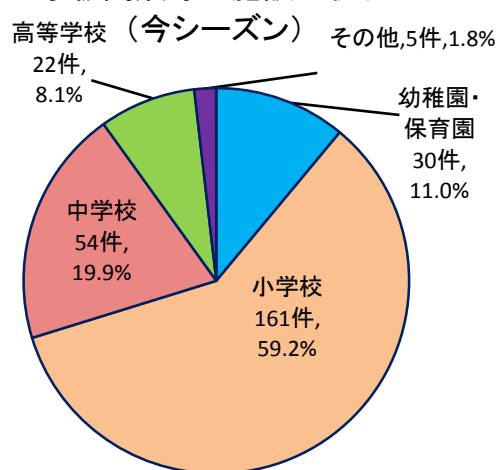
4 市内学級閉鎖等状況:第3週は70件^{※3}、第4週で142件と、報告数が急増しています。今シーズンの累計報告数は271件となり、報告された患者数(医療機関で診断された人数とインフルエンザのような症状のある人数の合計)は延べ4,684人となっています。今シーズンに学級閉鎖等を行った施設の内訳は、小学校が59.4%、中学校が19.9%となっており、小・中学校でのまん延防止が重要です。また、例年よりも中学校・高校からの報告が多い状況です。第4週の内訳は、幼稚園・保育園17件、小学校83件、中学校29件、高等学校11件、その他2件でした。

※3 追加報告があったため、流行情報9号から報告数が更新されています。

学級閉鎖等の施設数と患者数の推移



学級閉鎖等の施設の状況



5 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※4}あたりのインフルエンザ入院患者報告数は増加傾向にあり、第4週までの累計で121人となりました。うち、15歳未満が42人(34.7%)、70歳以上が51人(42.1%)となっており、小児と高齢者が多くを占めています。

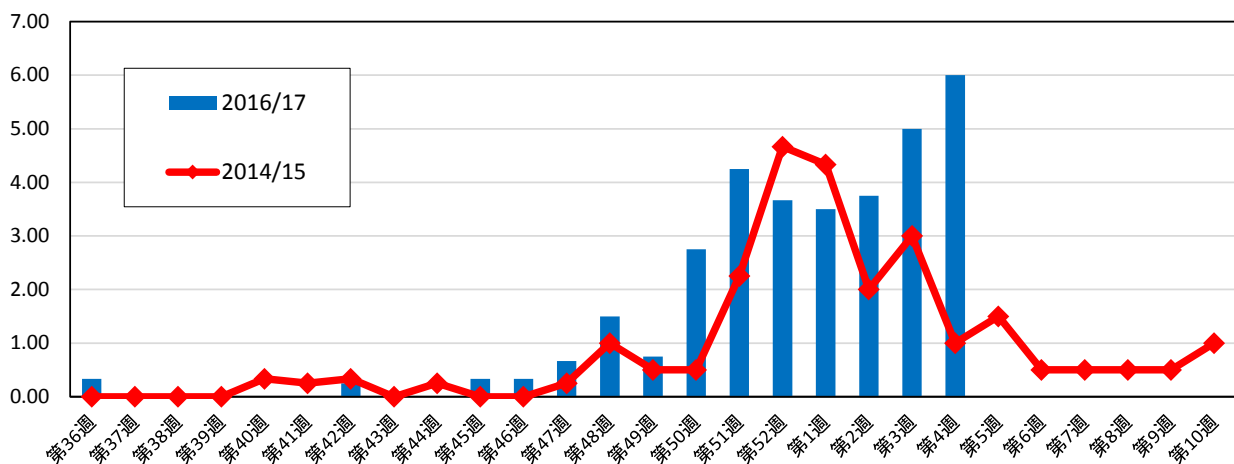
今シーズンと同時期に主にAH3型(A香港型)が流行した2014/15シーズンと定点あたり報告数を比較すると、2014/15シーズンより今シーズンの方が多く報告されています。

入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査が実施された重症肺炎や脳炎が疑われる入院患者(以下、重症入院患者)の基幹定点あたりの報告数も増加傾向にあり、特に小児と高齢者に多く報告されています。

第4週では18人(基幹定点あたり6.00)の入院患者の報告があり、うち9人が15歳未満、7人が70歳以上でした。重症入院患者は3人で、いずれも15歳未満でした。

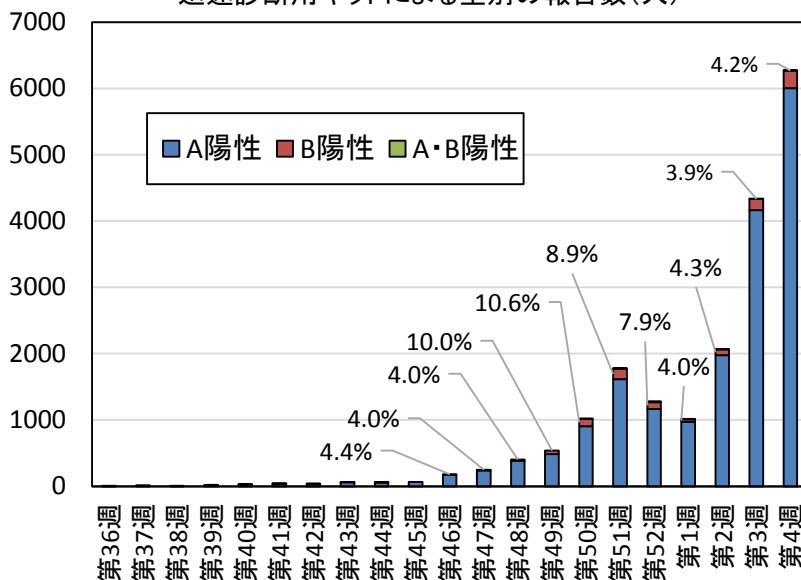
※4 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。

(人) 基幹定点あたりの入院患者報告数の推移

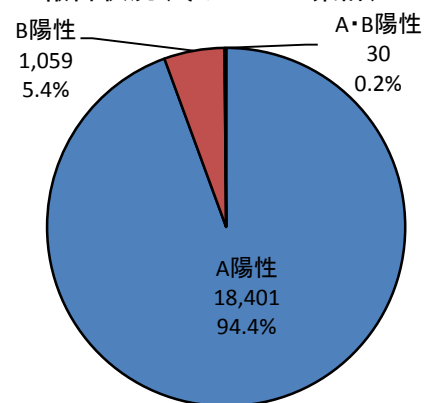


6 迅速キット結果:今シーズンの迅速キットの結果の累計は、A型18,401件(94.4%)、B型1,059件(5.4%)、A・B型ともに陽性30件(0.2%)で、A型が多く検出されています。第4週の迅速診断キットの結果はA型6,007件(95.8%)、B型263件(4.2%)、A・B型ともに陽性3件(0.05%)となっています。

横浜市の患者定点医療機関における迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



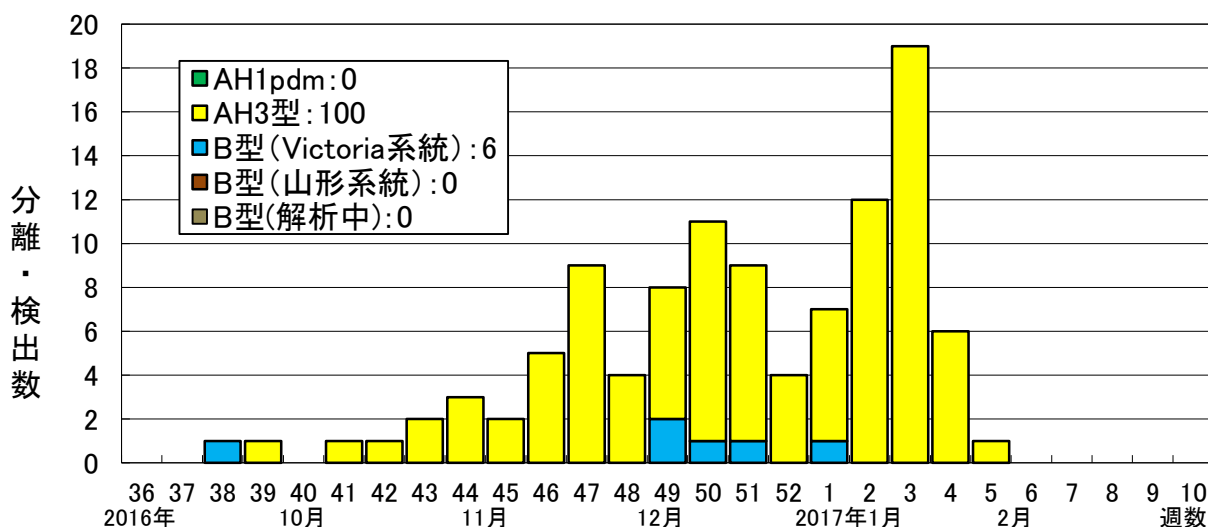
迅速診断用キットによる型別報告状況(今シーズン累計)



7 市内病原体検出状況:市内では病原体定点から AH3 型が最も多く分離・検出されており、全国※5の状況と同様です。

※5 [インフルエンザウイルス分離・検出速報\(国立感染症研究所\)](#)

病原体定点からのインフルエンザ分離・検出状況(2017年1月30日現在)



【参考】

市内で分離された AH3 株(細胞培養した 130 株)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)は、ウサギの血清を使っているため参考値ですが、すべて 8 倍以上でした。ワクチン類似とされているのは 4 倍以内であり、現在までに市内で分離された AH3 株については、ワクチン株と類似しているとは言えず、国立感染症研究所の結果と矛盾しない結果※6※7と考えられます。

一方、市内で分離された B 型株(細胞培養した 12 株)については、すべて 4 倍以内でした。

※6 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2016 年 12 月 28 日\(国立感染症研究所\)](#)

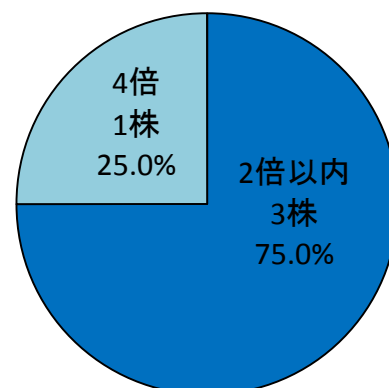
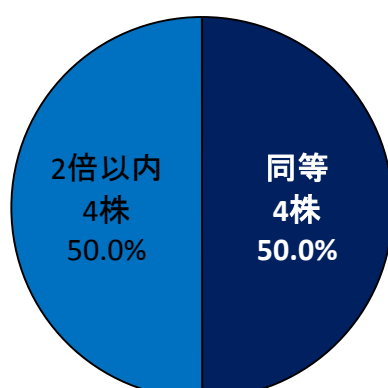
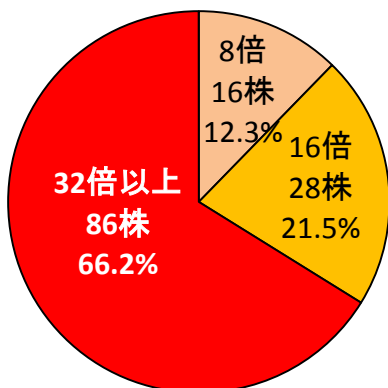
※7 [A\(H3N2\)亜型野外流行株の抗原性解析結果\(国立感染症研究所\)](#)

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析(2017年1月30日現在)

AH3 抗原性解析(130 株)

B ビクトリア系統抗原性解析(8 株)

B 山形系統抗原性解析(4 株)



■ 同等 ■ 2倍以内 ■ 4倍 ■ 8倍 ■ 16倍 ■ 32倍以上